

日本列島、先日来の雪が18豪雪、38豪雪(平成18年、昭和38年)に迫る勢い、屋根の雪かき事故で死亡者が多数出た、交通網等が寸断している。孤立地域が出たなどと報じられている。前回のブログに「カマキリの雪予想」を乗せたが、今年の雪予想はいかがだったかな。雪国を知らない我々には想像もできない苦労があるのだろうね。

昨日、鈴鹿の山に入った。「朝明(あさげ)方面に行くのに、去年トンネルが開通して便利になった」と朝7時半に澤山さんが迎えに来てくれて二人で一路高速道路。八日市IC、永源寺、トンネルを抜けると、鈴鹿山脈反対側の麓に出る。今までは反対側、三重県から鈴鹿に入ろうとすると、奈良から大回りをしなければならなかった。朝明駐車場に車を止めヤッケの上下、雪靴、スパッツ、てぶくろ、ピッケル。リュックには防寒具、アイゼン、弁当、水筒詰め込んで準備完了、10時過ぎ登山開始。

2時間ぐらい登った頃から雪が深くなって来る。踏み跡のない斜面を見上げると、陽の光で白い雪がキラキラ。昨日降った新雪がふんわり地面を覆っている。そのふんわり積もった柔らかい雪が風に舞って、空中を右往左往、キラキラである。

雪山は、踏み跡がついていたら「トレースがついている」といい、踏み跡がついていないと「ラッセルして登らねば」という。雪がなければ、登山道があるが、全く見えないので道は分からない。適当にこっちの方だと見当をつけて、雪の少なそうなところを探して登る。ピッケルで突いても、根元まですっぽり隠れる。登山靴が30,40センチ潜るぐらいなら楽だが、50,60センチ潜りだすと、次の一步に倍の体力と時間がかかる。「わああ」と片足が下まで落ちると両手でもがいて抜け出すのに四苦八苦、雪の上を泳いでいるような不細工な格好だ。新雪の下は凍った硬い雪。硬く安定した雪を踏みしめて登ってゆくが、斜面の氷はすべる。「蹴り込め」とうしろから声、足先が引っかけると又ズルリと落ちる。ラッセルを続けていると、ハーハーゼーゼー、息も荒く大汗も出る。

このペースだと頂上まで後1,2時間。雪の上に写る影も長く伸びてきて午後の時間帯。まだ1000メートル少しの標高だが、風は冷たい、手袋を外して写真を撮っていると手が痛い、身体は冷えてくる。本日はこれまでと、早々に下山。ラッセルをあれだけ苦労して登ったのに、くだりは靴のかかとをブレーキにスイスイ歩ける。この場所では転んだ、この場所では嵌った、この場所では滑った、この場所では泳いだ、いくつもの場所を横目にスイスイである。一日雪遊びをさせてもらった。

昨日のラッセルの話から山の事を色々思い出した。怖かったのは寒い冬の朝「さあ帰ろう」と斜面を下りるが、雪が硬くてアイゼンがささりにくい。靴を斜面にたたきつけて我がへっぴり腰は恐る恐る降りるのである。「この斜めさん早く緩くなってくれ」と祈りながら、そろりそろり。山のうまい奴は、凍った斜面もぱっぱと下っていく。

冬の尾根道、上に行くほど凍ってくる。眼だけが出る帽子、まつ毛も鼻毛も雪がついて、足元はガシガシと氷の音「いやだなあ」と思うが、コレもまた山のうまい奴は、「こ気味がいい」とぬかされる。

森林限界という言葉があって、普通日本では2500メートルぐらいから上には、デカイ木が育たない。木が生えていれば、幹を、枝を、根を掴めば安心だ。関西の山は低いので気は生い茂っている。多少斜度があっても、気を掴んで登ればいい。オレ自慢だけど、枯れ木としっかりした木の見分けは上手だよ。

何人かで登る時、代わる代わる先頭でラッセルをする。先頭が足跡を付けてくれたら歩きやすい。いつも正月には信州の高い山でもたくさん的人が入って、足跡が付いている。山岳部の学生らが付けてくれたら最高だ。ラッセルは若者にまかせよう。とはいえ、雪まみれになって楽しむのもいいものだ。

去年も何度か、てっぺんの雪の上にテントを張って寝た。「よくまあこんな寒いところで」と思われるでしょうが、これがなかなか楽しい。煮炊きの水は雪を溶かす。あまりに寒いとガスコンロが点かない。寒冷地用ガスがですぞ。零下 20 度は、もうこりごりだねえ。しかも一人で二泊もした。テントの中はバリバリだ。

0035 生殖器官の話 090212

まず始めに「あなたは 18 歳以上ですか」と言われるだけではつまらないので、言ってみただけ。

「花とは、植物の生殖器官」と日高敏隆先生はいう。なるほど考えてみればごく当たり前の話ですね。ただ“生殖器官”という単語に驚き納得。“生殖”という単語を意識するのは、人間だけかな。人はその花を見て「きれいだ美しい」と愛でる。その点動物の生殖器官は、特定の場合(この話は後日また)以外は「汚らしい、美しくない…」と言葉を濁す。普通の生活で花を咲かせ、花を飾る。普通の生活で、動物の生殖器官を見つめないし、愛でない。「花は美しい、それでいいじゃないか、生殖器官なんてこじつけるな、学者のいう事なんか聞くな」と怒る方もおられるやも…。

驚くのは、日本のいろんなところで、デッキ男根や女陰が石や木で造られ、飾られている。それにしめ縄が巻かれ、善男善女が祈っている。子宝という言葉があるが、「子孫は人類の宝だ」と年々思うようになった。生殖器の像を神格化して祈るのもすばらしい。今の人がでかいペニスを作って、門の前に置いたら、うしろ指を差されるだろうが、昔の人はえらい。アジアではこんな像がたくさんありそうだが、他の地域ではこんな風習あるのだろうか。「衣食住足りて」ではなく生殖は衣食住より大事だ。人も生物も、自身の生命が減びても子孫を残す、というように生殖を大事にするのかな。

日本はどんどん人口減少だそう。昔、団塊の世代がゴソツト無くなれば、日本はうまくいくなで冗談を言っていたが、「団塊の世代に含まれるオレ、無くなるのはちょっと…」と今は思う。人口は減った方がいいのか増えた方がいいのか、というには、オレ、政治、経済、国体に、無知すぎる。だれかが「“婚外子”なんて区別をするな」と言っていたが、この話、花丸だね。画像は 15 年ぐらい前の裸婦デッサン。

0036 歩く 120212

「日々、真理を追究して生きている」と語らせた先生がおられた。

「座禅をして追究すれば、おのずと悟れるなら、カエルはもつとすごいぞ」と禅僧弁。

家の近所を歩くときには、整備された道を、事故に、人にと注意を払いながら目的地まで行くだけなので、歩くと言ってもつまらない。その点、山や川や森を歩きだすと、全く違ってくる。道といえども、小さい穴があいていたり、石ころがあったり、木の根っこがあればそれに躓く。そんなものに注意しながら、地面を見つめて歩いている。観察も思考もない。空想も想像もない。何も考えず、見もせずただ歩くだけの、何がいいのか楽しいのかと問われれば、「動物のように身体が、動く、歩くという動作を楽しんでいる」と答えるだけ。とにかく何も考えず、下だけ見て、モクモク歩くのは、楽しいし気持ちがいい。日本にはこういう場所がたくさんあるのは、いいことだ。

山に行くと鹿の足跡がたくさんある。草を食べ、水を飲み、泥遊びをして、糞をする。昔は天敵のオオカミから逃げるために、お走りもしたのだろうね。それでも鹿は、歩きまわっている。鹿が歩くのは目的のためか、楽しむためか、そのうち動物行動学でも読んで調べてみよう。オレ鹿のように何も考えずに歩けたら最高だが、彼らの身体能力は人間の百倍も千倍もありそう。鹿氏「ただ歩き走り回っているだけではないぞ…」なんておっしゃるかも。

絵を描く時も、うろろする。狭い床の隙間をうろろする。絵には触れない。横を、上を見る。窓を、床を見る。次の色が、形が浮かんでこない。浮かんでこない時は、それで終了という長い時間。浮かんできたら幸いだ。すぐに手を入れる。しかし成功率は一割もない。こんなことで、オレの時間はどんどん経ってゆく。

画像は30年ぐらい前に描いた油絵。

0037 個展 150212

“岡村隆久展”を4月末の週に開催いたします。「おまえさん、ちいと、己惚れてるんじゃないかねえのか」と言われそうですが、<近頃なんだか楽しい。近頃なんだかうまくゆく。近頃なんだかいいのじゃないのか>と思う事が多い。これは絵の話、絵を描く話。昔は構図に困っていた。絵を描き始めて途中から「違うなあ」と何度も思った。絵の具の使い方もそうだけど「違う」「違うのでは」の連続だった。絵を描きながら、下図の失敗、構図の失敗、途中の失敗、次から次と失敗が出てきたものだ。そんな事が、最近はなくなった。考えもしなくなった。「なにを描こう」「どうして描こう」苦もなく事もなく自然に進んでゆく。だからといっていつもいつも傑作作品が仕上がっているわけではないが>昔のように<アカン、だめだ>ではなく「ひよっとしたら、オレ成長したのかな」と思うこのごろだけど、ちょっと遅すぎるのではと怒られそう。そんなこんなで進行中の、壁にかかった絵、床に置かれた絵を見ていると、うれしくなってくるのです。

展覧会の案内状に載せる絵を選んでみました。こんな事もまた、昔は案内状に載せるいい絵がなかなか見つからず、思案していましたが、今はどれにしようと思案。はがきにうまく収まり、見栄えがするものもいいと畳ぐらいの大きさのものを選びました。普通は正面から写した写真を使うが、斜めから見ようと決めました。それが図版です。

ちょうど去年、同会場での展覧会最中に、東日本大震災だった。3万人近くの人が亡くなられた。その3万人の方々には、30万人、100万人の関係者がおられたでしょう。とにかく何も言えないし、何も出来ないが「みなさんがんばって！！」

0038 最近オレの風呂事情 160212

廻りに居られるほとんどの方が、風呂に入るのが大好きだという。温泉に入るのはおおいに楽しいという。オレは、数少ない派だと思うが<風呂は身体を洗うために入る>のである。娘の、夫妻とも同級生友人の話「夫君は、オレきれい好きと30分以上、細君はサッと10分、私も30分から1時間」という。温泉で他の方の様子を見ていると、身体を洗う時間は、同じようなものか、少し丁寧なくらいだが、湯船をあちらこちらと移動したり、椅子に腰かけたりと、皆さんのんびり時間を過ごしている。

この年になって我が家にもシャワー設備ができた。当初はほとんど使わなかったが、いまや、風呂桶よりもシャワー派に変わった。極寒の今の季節でも服を脱ぐところでストーブに点火して、シャワーの栓をひねる。1分もすると温水が出てくる。頭、身体と順に洗って、温水シャワーで仕上げ。簡単、早い、しかもきれいになる。満足している。

山には何度も登るが、山から降りてきたら、まず温泉に入る。2,3日間の山籠りの後の温泉は、値打ちがある。汗と汚れを洗い、湯に浸かって身体をほぐす。寒い季節は温まる。今までで一番気に入ったのが、上高地入口の釜トンネルにある“朴伝の湯”その次が大台ガ原付近、“入之波シオノハ温泉”ただオレのように<風呂は身体を洗うために入る>という人には、普通の風呂屋が最適なのだ。図版は面白い思い出。2,3日の雪山を降りてきて、とある温泉安宿の露天風呂。「寒いけど、露天風呂に入るか」と脱衣所から外へ出たものの、一瞬寒い、これはダメだと湯に飛びこんだ。ところが湯の熱いこと。積もった雪を掻き入れて「熱い、寒い、冷たい」と叫びながら、夜空を見上げる露天風呂でした。

0039 またまた内と外の話 180212

先日来考えていた内と外の話。この考え方で絵を描いていると、どうしても解けなかった問題が、ずっと解ける。なんだか数学の問題を解いている感覚、作業の表現のようだけれど、縫れた糸がずっと解けるという意味では、子どもの頃、一生懸命解いていた数学の問題と解決の方法が似ているかもしれない。画面が絶対として、絵には画面しかないのだから、これは絶対なのだが、画面の中のどこかを対象物として、その対象物から展開した広がり画面を作ってきたというのが、今までの解決方法だった。けれども、どうしても行き詰ってしまう。止まってしまう。お手上げ状態になってしまう。

ここで発想の転換。外からではなく内から攻める。対象物が画面の中にあるのではなく、画面の中にあるのは自分自身、自己自身で、その自分、自己が画面を作っていく。その絵は、画面の中に対象物を描くのではなく、中に存在する、自分、自己が絵の中で絵を描く。画面の中に、自分、自己が在る。中に在る、自分自己が、外に向かって絵を描く。この方法で、一つ二つ三つと成功してきた。解決できた。

植物園に行って“奇想天外”というケタイな名の植物を見つけスケッチをした。“奇想天外”は2枚の帯状の葉を左右に出し、その2枚の葉だけがどんどん伸びて、何千年も生きるらしい。ところが地球上の自然条件で、風や嵐によってだろうけれど、千切れ、絡まり、破れ上下左右にこんがらがっている。そのスケッチを描きながら「宇宙とはこんなものかもしれないなあ」と想像。宇宙では、帯やら紐やら塊やらが、千切れ、絡まり、破れ上下左右にこんがらがり、おまけに、無が在り、時がない、と大変なことになっているのかな。そんな中でオレ、何処に立つ、何時に立つ、と考えるだけでも面白い。しかしこれが世界。これが内と外の考え、かな。いつまで続く、どこまで続く。

0040 ゆきかき 230212

去年に続いて今年で2度目の雪掻きだ。富山県といっても、金沢市の東 20 キロぐらいの処。加賀百万石というが、その村の何十軒かの家が、木造瓦葺、梁柱の木組が交錯し、その間に白い漆喰壁が雪に映えて美しい、堂々とした家ばかりだ。友人の奥さんの持ち物で、今は空き家、年に何度か親類縁者が寄るだけだそうだ。「うちは村では小さい家」とおっしゃるが多少小ぶりなだけ。床の間と同じぐらいの大きさの仏壇は、金ぴかに光っている。昔、美術学校は、東京、京都、そして金沢に在った。それだけ工芸美術に熱心な土地柄だったのだろうね。金沢美術学校出身者を何人か知っているが、色使いが、九谷焼や、加賀友禅を想わせる、ちょっとケバイ(失礼)色使いをされるかな。いつも山を降りて、水田の広がる富山や石川を走りながら「きれいな田舎街だなあ」と思う。もしこれを読まれて、「おれんちもきれいだぞ」とお国自慢が聞けたらうれしい。

「いやあ近づいたぞ」と二度目の懐かしい家が見えてきた。家のそばまでは除雪されていた。まず長靴にはき替えて、車に積んでいるスコップを出して、入口までの 10 メートルを雪掻き。天気予報では大雪・雷となっていたが、小ぶりの雪。「新しいダンプがあったから、力のある人は、これですと楽」とよく目にする雪国の人々が屋根の上で使っている大きなスコップ。去年は、屋根から滑り落ちた雪に雨が降り、その雪が凍り、アルミのスコップがひしゃげるほどに雪が堅かった。その点今年の雪は柔らかい。2,3 日前の積もったばかりの新雪かな。

今年は平成 18 年の、一八豪雪を上回るかも知れないと、言われているわりには、この辺りは去年とそう変わらない積もり方。ダンプをぐっと雪に差し込んで、そろりそろりとバック、U ターンをして川に捨てる。またまたぐっと差し込んで・と繰り返す。着いた日は夕方の 2 時間、あくる日は朝から 6 時間ぐらいの労働で、家の周りに積もっていた雪が 1 メートルぐらいは減った。「これで、豪雪がなければ融けるのを待つばかりだけど、大雪が降ればもう一度雪掻きに来なければ」と奥さん。「とにかく楽しかった」とオレ。何も考えずダンプの往復、何も考えず山を歩くのと同じと、ご満悦である。

雪国では外出時、男も女も長靴だ。最近の長靴は色も形もなかなかお洒落。去年は冬用登山靴を、今年は長靴を持っていった。一長一短である。長靴はすぐに履けて、すぐに脱げる。登山靴は、防寒に優れていて、何時間の作業も平気、それに足が

雪にズボリと潜っても簡単に抜け出せる。どっちもどっちだが、ほとんど使った事がないオレの長靴、劣化で破れている。来年は登山靴だ。

0041 人権の会 240212

人権の話をするということで、頑張って20ページほどの文章をまとめて話した。今回は被差別部落の問題をテーマにした。絵が半分、文章が半分のまとめ方だが、文章と言ってもほとんど人の話を抜粋して、それを読みながら、所々で自分の意見を話した。

人権という言葉は好きではない。いかにも「権利を主張しないと損だ」とでもいうのか。人は“人権”という言葉を使って、人を殺す、犯す、戦争をする、投獄する。だからと言って今、それに変わるいい言葉は浮かばない。「話し合う」「話を聞く」「愛」という言葉は嫌いだ(照れくさい)、“慈愛”ならいいかも。言葉の事は余人にまかそう。

人権に関心を持ったのは10年ぐらい前に連れて行ってもらった市バスツアーでの“お姉さん”が始まり、図版の絵もその絵だ。奈良県橿原市“おおくぼまちづくり館”で案内してくれたお姉さんがマイク片手に大きな声で悲哀を叫んでいた。案内嬢がなぜこんなに激昂しながら話すのか。その方の顔は忘れてしまったが、口調は耳に残っている。それまで被差別部落の事をほとんど知らなかった。館内に展示している物を読んでいたら、バスが発車寸前だった。

先日も府の人権の方の講演の話。差別には、上下と内外が在る、とたとえ話。大きな商家に主人夫妻に子どもがいる。住み込みで、丁稚に下男下女がいる。身分の区別はあるが同じ屋根の下に住んでいる。ところが被差別部落の人は同じ屋根の下には住ませない。ましてや子守をさせるなんて汚らしい。つまり、“外”とは関係を断つ、仲間に入れられないという意味。

差別の話はこれぐらいにして、さあ、これから、オレたち、どう生きるかだ！

当ブログ 12/10 しあわせ考への投稿

今、百寺巡礼 ブータン編 五木寛之著を読んでいますその中に、ブータン仏教の幸福 が書かれています。大切なのは個人でなく関係。人と人の関係、人と今食べている鶏と自分の関係、コメとの関係、森との関係。西洋思想は個を重要視するが、この国ではこの世の生きとし生けるもの、さらには過去の先祖さままで含めてつながりを大切に社会という。だから幸福は個人の幸福ではなくつながりのなかでの幸福、みな幸福というのがこの国の幸福感覚のようです。ぼくを含め今の日本では失われた幸福感覚です、大切なことをこの国は明治維新で失ってしまった。

だから、これから、オレたち、本物を取り返さねば。まだまだ本物は在るよ、絶対。

0042 川で会う鷺の話 260212

安威川には二種類の鷺がいる。五位様も居られるが昼間はあまり見ない。白色と灰色のものだが、色が違うだけで、大きさ形は同じに見える。専門家が見たら違いがわかるのかも。じっと止まっている姿は優美だ。「あれが優美」と言われるかもしれない。そばに鶴や白鳥がいればその表現が違うかもしれないが、鷺君も立ち姿はなかなか凜としている。飛ぶ時は、首をS条に縮めている。鶴や白鳥はまっすぐに伸ばした状態で飛んでいるように記憶しているが、飛行スタイルの違いは何だろうね。鷺の鳴声はすごい。「ググギャー」「ギャー」とも聞こえるかな。最初聞いた時は「汚い声で鳴くのはなんだ」と空を見上げた。姿のわりには美しい鳴声だ。ただし稀にしか鳴かない。新鮮な魚を食べているからか、糞尿は白い泥状のものを空からバサッと落とす。地上にたたきつけられて、小ぶりのお盆ぐらいに広がっている。

鷺は稀に親子と思われる、大きいものと小さいものがペアでいる以外は、ほとんどが単独で餌を漁っている。見ていると、どうも彼らは餌を捕るのが下手なようだ。毎日河川敷で、20,30匹の鷺を見るが、魚を口に咥えている姿はなかなか見られない。彼が、水の中をそろりそろりと忍者のような足捌きで進み、長い首を前に倒しながら、いつでも魚に嘴を突き刺せる姿は何度も見ているが、どうもその都度失敗しているみたいだ。魚を捕らえると、小魚ならそのままパクリと頭から呑み込む。少し大きめの魚なら、嘴で砕くように何度も噛んで、頭を手前にして呑み込む。その後一口「うめえ」と水を飲むようだ。

鷺は人間が好きではないと思われる。近寄っては来ないどころか、人の気配を感じると、サッと羽ばたいて行ってしまう。ところが時々釣り人の傍で、じっと立っているやつがいる。辛抱強く待っているが、目は別の方角を向いている。見ていると、釣り人は魚が釣れると、ぽんとつまんで鷺に向かって投げる。鷺は「おおきに」と魚をまる飲みにする。釣り人と鷺との距離は3メートル以上は近づかない。それでも釣り人がいる間は、鷺は、ずっといるようだ。

調べたら、大きい白色が“ダイサギ”大きい灰色が“アオサギ”

普通にいう“しらさぎ”とはコウノトリ目サギ科の全身白いものをいう。ダイサギ・チュウサギ・コサギ・カラシサギ